



令和7年(2025年)2月18日

特別公開「雛と雛道具」を開催します

このたび、彦根城博物館において、みだしの展覧会を開催いたしますのでお知らせします。

記

1 展覧会名称

特別公開「雛と雛道具」

2 会 期

令和7年(2025年)2月22日(土)～3月16日(日) *3月11日(火)は休館

開館時間：午前8時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）

3 会 場

彦根城博物館 展示室1

4 展示の趣旨

3月3日の上巳^{じょうし}の節句に行われる雛祭りは、女兒の健やかな成長を祈る行事です。元来、上巳に限らず、節句は季節の変わり目にあたるため、病気などの災いが降りかかりやすい日と考えられてきました。そのため、節句には厄^{やく}を払う祈りをし、厄を受ける身代わりとして人形^{ひとがた}を作り、神に供えたり、厄払いとして川や海に流すということが行われました。後にこの人形は、飾り付けて楽しむものへと変化して行きました。江戸時代に入ると、桃の節句に、人形とともに菱餅や菓子、白酒などを供えて賑やかな飾り付けをして祭りをを行うという、現代につながる習わしが定着しました。この人形は雛と呼ばれ、より華やかで精巧なものが作られるようになります。そして、実際の調度類を模したミニチュアの雛道具も作られ、雛と共に飾られるようになりました。

江戸時代の大名家の姫君の婚礼の際には、嫁入道具として、豪華な調度とともに雛と雛道具が詠えられました。雛道具は、婚礼調度を模し、数十件にも及ぶ大揃い^{おおぞろ}のものとするのが通例でした。井伊家13代直弼^{なおすけ}の息女弥千代^{やちよ}(1846～1927)が、安政5年(1858)に高松藩松平家世子頼聡^{あんせい}(1834～1903)に嫁いだ際にも、婚礼調度とともに愛らしい雛と雛道具が詠えられました。

弥千代の雛は、紙製の衣装をまとう古式ゆかしい立雛^{たちびな}です。雛道具は、井伊家の家紋

の ^{たちばな}橘 と松竹梅の文様が^{きんまきえ}金時絵であしらわれ、実物の調度さながらに精巧に作り込まれています。その数は85件にも及び、賑々しい婚礼仕度の様子を今に伝えてくれます。本展では、^{こきんびな}弥千代の雛と^{ごでん}雛道具を中心に、地元の旧家に伝わる古今雛や段飾り、御殿飾りなどが一堂に会します。

今年度、当館では、経年劣化が進んで展示不可能となっていた弥千代の雛の修理を実施しました。本展は、その修理後初のお披露目を兼ねて開催するものです。よみがえった雛の可憐な姿とともに、春を彩る華やかな飾りの数々をご堪能ください。

5 展 示 作 品

別添リストの13件

6 観 覧 料

一 般 700円(560円)

小・中学生 350円(280円) ()内は30名以上の団体割引料金

*常設展「“ほんもの”との出会い」も併せてご覧いただけます。

7 関 連 事 業

(1) 修理完成記念講演会「よみがえった雛人形 ～文化財修理の最前線～」

講 師：坂田 さとこ氏（坂田墨珠堂 代表取締役社長）、奥田 晶子（当館学芸員）

日 時：令和7年(2025年)3月1日(土) 午後2時～3時30分

会 場：当館 講堂

定 員：50名（当日先着順）

資料代：100円（展示の観覧には別途観覧料が必要）

(2) ギャラリートーク

日 時：令和7年(2025年)2月22日(土) 午後2時～ *30分程度

会 場：彦根城博物館 展示室1

参加費：無料（観覧料が必要）

講 師：奥田晶子（当館学芸員）

問い合わせ先

彦根市教育委員会事務局

彦根城博物館 学芸史料課

担当：奥 田 晶 子

（電話 0749-22-6100）

* 特別公開「雛と雛道具」展示作品リスト *

NO.	名称	数量	年代	所蔵
弥千代の雛と婚礼調度				
1	やちよ ひな 弥千代の雛	1対	江戸時代後期	本館蔵(井伊家伝来資料)
2	やちよ ひなどうぐ 弥千代の雛道具	85件	江戸時代後期	本館蔵(井伊家伝来資料)
3	やちよ かご 弥千代の駕籠	1棹	江戸時代後期	本館蔵(井伊家伝来資料)
旧家の雛				
4	ひなだんかざ 雛段飾り	1揃	昭和時代前期	本館蔵(加納基弘氏寄贈)
5	こきんびな 古今雛	1対	江戸時代末期	本館蔵
6	こきんびな 古今雛	1対	江戸時代末期	本館蔵(森嶋美代子氏寄贈)
7	こきんびな 古今雛	1対	江戸～明治時代	個人蔵
8	ひなごてんかざ 雛御殿飾り	1揃	昭和時代前期	本館蔵(青柳和子氏寄贈)
9	ひなごてんかざ 雛御殿飾り	1揃	明治33年(1900年)	本館蔵(山本高嗣氏寄贈)
10	ひなごてんかざ 雛御殿飾り	1揃	昭和時代前期	本館蔵(尾賀信子氏寄贈)
11	まめにんぎょう・だいどころどうぐ 豆人形・台所道具	1揃	大正～昭和時代	本館蔵(山田米子氏寄贈)
12	みつおりにんぎょう 三折人形	2躯	大正～昭和時代前期	本館蔵(若山夏江氏寄贈)
13	いちまつにんぎょう 市松人形	1揃	昭和時代初期	本館蔵(平居圭子氏寄贈)

写真解説

*番号は作品リストの番号と一致します。

1 弥千代の雛 一对

男雛 高 30.6cm 女雛 高 24.7cm

江戸時代後期

本館蔵（井伊家伝来資料）

雛段などに立てかけて飾る立雛という種類の雛です。衣装は紙製で、室町時代頃の形式の装束となっており、男雛は小袖と袴はかまを着け、女雛は小袖に細帯を締めています。まるで団子に目鼻をつけたかのような顔は、次郎左衛門雛という雛の形式に則ったもの。あどけない顔立ちが愛らしい一对です。

この雛は、近年、経年劣化が進んで展示できない状態となっていました。今年度、念願の修理を実施することができました。今回の展示は、修理後初のお披露目となるものです。



2 弥千代の雛道具 一揃（写真はその一部）

江戸時代後期

本館蔵（井伊家伝来資料）

貝桶かいおけや三棚さんたな、挟箱はさみばこなど85件からなるミニチュアの調度類。弥千代の婚礼に際し、婚礼調度を模してあつらえられました。井伊家の家紋である橘紋たちばなもんと共に、根引きの小松、笹竹、梅枝の模様が描かれ、全体に統一感ある意匠となっています。



弥千代の雛道具のうち 角盥つのだら 盥たらい 湯桶ゆとう 櫛台くしだい 手拭掛てぬぐいかけ 鏡台・柄鏡きょうだい えかがみ

洗面や化粧のための道具のミニチュアです。角盥は半球形の盥に4本の角がついたもの。二人で角を持って運び、うがいや手洗いに使います。盥と湯桶は揃いで用いるもので、湯桶の湯水を盥に注いで使います。

櫛台は盆形の天板と抽斗を組み合わせた作りで、抽斗には小物を整理して納め、必要な時に天板にのせて使用しました。手拭掛には手拭いを掛け、鏡台に据えた柄鏡で身だしなみを調えました。いずれも黒漆塗に金蒔絵で橘紋と松竹梅の模様が表わされており、ミニチュアながら丁寧に作り込まれています。



3 弥千代の駕籠 1 棹

縦82.3cm 横112.2cm 高106.5cm

江戸時代後期

本館蔵（井伊家伝来資料）

弥千代の婚礼調度として調えられた駕籠です。黒漆塗に井伊家の家紋の橘紋と、松平家の家紋の葵紋が、松竹梅の模様とともに金蒔絵で表わされています。随所に飾り金具が付けられ、内側には鮮やかな彩色で花鳥画が描かれています。

なお、この駕籠のミニチュアである雛道具の駕籠も展示いたします。実物と見比べることで、ミニチュアの精巧さをじっくりご覧いただくことができます。



5 古今雛 一対

男雛 高 44.5cm 女雛 高 43.4cm

江戸～明治時代

本館蔵

男雛と女雛の一対。公家風の衣装をまとう内裏雛の一種で、江戸時代明和年間（1764～1772）に江戸の人形師原舟月が創始した古今雛と呼ばれるものです。造作は細やかに整っており、目元や口元、髪の毛の生際などの細部を描き出す柔らかな筆遣いは、制作者の確かな技量を感じさせます。



9 雛御殿飾り 一揃

高 64.5cm

明治33年(1900年)

本館蔵（山本高嗣氏寄贈）

紫宸殿を模した御殿の中に男雛と女雛、官女を、御殿の周りには隨身や仕丁などを配した雛御殿飾りの一揃です。雛御殿飾りは、江戸時代の末頃から盛んに行われるようになり、明治時代に広く普及しました。

この御殿飾りは、明治33年(1900年)3月に生まれた千代という女性の初節句のために、京都で製作されたものです。御殿は大振り（はつぜつく）で、飾り金具をあしらった蒔戸（しとみど）や房飾りの付いた御簾など、細部まで丁寧に作り込まれています。明治期の雛飾りを今に伝える貴重な優品です。

